

# 京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(4年計画の3年目)

## 1. 研究課題

前近代内陸アジアとその隣接地域の文化と社会

Studies on the Cultures and Societies in Premodern Inner Asia and its Adjacent Areas

## 2. 研究代表者氏名

稲葉 穰

Inaba, Minoru

## 3. 研究期間

2019年4月-2023年3月(3年目)

## 4. 研究目的

いわゆる古代文明発祥の地であり、伝統的に独自の歴史文化を形成してきたとみなされる西アジア、南アジア、東アジアは地理的には海上と内陸アジア（中央アジア、中央ユーラシアとほぼ同義で用いる）の陸上ルートを通じて様々な形で接触してきた。その接触の場を提供し、時にこれら大陸縁辺の世界に多大な影響をおよぼした内陸アジア世界もまたそれらの地域と同等に一つの文化世界、歴史世界であるかのように措定されてきたが、そのイメージは砂漠とステップと遊牧部族が支配的な空間、というものであった。しかし20世紀末にソヴィエト連邦が崩壊し、パミール以西の内陸アジアが世界の研究者に対して門戸を開き、また東トルキスタンにおいて中国の非常に活発な研究が進んだことにより、当該地域を研究するための材料や視点は漸次増大してきている。このような状況を踏まえ、今後進められねばならないのは、上述のようにステレオタイプ的に理解されてきた内陸アジア内部の地理的な diversity や、社会結合のあり方、都市に関するより詳細な研究である。本研究班は古代から近代に到る内陸アジアとその隣接地域に関する様々な社会研究、文化研究のケーススタディを積み重ねることで、多様な内陸アジア像を描き出し、ステレオタイプ的な理解の克服を目指す。

West, South, and East Asia, traditionally regarded as "civilizational centers", have been in contact with each other through maritime and inland routes. Inner Asia (almost synonymous with Central Asia/ Central Eurasia), which served as a contact zone for these areas and at times greatly influenced them, has also been perceived as an independent historico-cultural world. Even today, the common image of Inner Asia is one of deserts and steppes where monolithic, nomadic tribal societies and cultures prevail. However, starting with the last

two decades of the 20th century, materials for further researching the history of the area in question have started to become increasingly available. Based on such materials, the issue of the diversity of societies and cultures within Inner Asia has been attracting more and more attention. The purpose of our research project is to shed light on the history and culture of Inner Asia through case studies of its societies and cultural interactions, etc. from antiquity to the early modern period.

#### 5. 本年度の研究実施状況

コロナ禍のゆえに全面オンライン形式に移行し、かねてより会読を進めていた13世紀ペルシア語地方史の写本の読解を進めた。結果としてあともう数頁を残すところまで読み進むことができた。史料会読についてはオンライン形式はそれなりに適合性が高いと考える。ただ、最後まで会読し、訳注を整える作業が残っているため、一年間の延長を行うこととした。

#### 6. 本年度の研究実施内容

2021-04-09 前近代内陸アジアと隣接地域の社会と文化 ヘラート史会読 発表者 川本正知  
奈良大学

2021-05-14 前近代内陸アジアと隣接地域の社会と文化 ヘラート史会読 発表者 森山央朗  
同志社大学

2021-05-28 前近代内陸アジアと隣接地域の社会と文化 ヘラート史会読 発表者 森山央朗  
同志社大学 ヘラート史会読 発表者 角田哲朗 京都大学

2021-06-11 前近代内陸アジアと隣接地域の社会と文化 ヘラート史会読 発表者 角田哲朗  
京都大学

2021-06-25 前近代内陸アジアと隣接地域の社会と文化 ヘラート史会読 発表者 角田哲朗  
京都大学 ヘラート史会読 発表者 稲葉穰

2021-07-09 前近代内陸アジアと隣接地域の社会と文化 ヘラート史会読 発表者 稲葉穰

2021-09-24 前近代内陸アジアと隣接地域の社会と文化 ヘラート史会読 発表者 杉山雅樹  
京都外国語大学

2021-10-22 前近代内陸アジアと隣接地域の社会と文化 ヘラート史会読 発表者 角田哲朗  
京都大学

2021-11-12 前近代内陸アジアと隣接地域の社会と文化 ヘラート史会読 発表者 稲葉穰

2021-11-26 前近代内陸アジアと隣接地域の社会と文化 ヘラート史会読 発表者 川本正知  
奈良大学

2021-12-10 前近代内陸アジアと隣接地域の社会と文化 ヘラート史会読 発表者 杉山雅樹  
京都外国語大学

2022-01-14 前近代内陸アジアと隣接地域の社会と文化 ヘラート史会読 発表者 稲葉穰

2022-01-28 前近代内陸アジアと隣接地域の社会と文化 ヘラート史会誌 発表者 川本正知  
奈良大学

2022-02-25 前近代内陸アジアと隣接地域の社会と文化 ヘラート史会誌 発表者 川本正知  
奈良大学 ヘラート史解説 発表者 小倉智史 東京外国語大学

2022-03-11 前近代内陸アジアと隣接地域の社会と文化 ヘラート史会誌 発表者 小倉智史  
東京外国語大学 ヘラート史会誌 発表者 稲葉穰

#### 7. 共同研究会に関連した公表実績

なし

#### 8. 研究班員

所内

稲葉穰、船山徹、稲本泰生、中西竜也、檜山智美、Erika Forte、慶昭蓉

学内

帯谷知可(東南アジア地域研究研究所)、内記理(文学研究科)、角田哲朗(文学研究科)、大  
津谷馨(文学研究科)、今松泰(アジアアフリカ地域研究研究科)、磯貝健一(文学研究科)、  
井谷鋼造(京都大学)、吉田豊(京都大学)

学外

宮本亮一(東京大学アジア研究図書館)、和田郁子(岡山大学社会文化科学研究科)、真下裕  
之(神戸大学人文学研究科)、伊藤隆郎(神戸大学人文学研究科)、影山悦子(名古屋大学人  
文学研究科)、川本正知(奈良大学文学部)、入澤崇(龍谷大学)、岩井俊平(龍谷大学龍谷ミ  
ュージウム)、杉山雅樹(京都外国語大学)、小野浩(京都橘大学)、森山央朗(同志社大学神  
学部)、井上陽(相愛大学)、上枝いづみ(龍谷大学)、小倉智史(東京外国語大学)

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 (必須)	受入人数					延べ人数				
		総計	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生
学内(法人内)	3	7				2	80				15
国立大学	6	7					40				
公立大学											
私立大学	4	8					60				
大学共同利用機関法人											
独立行政法人等公的研究機関											
民間機関											
外国機関											
その他 ※											
計	13	22 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	2 (0)	180 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	15 (0)
※「その他」の区分受入がある場合 具体的な所属等名称を記載：例) 高校教員 無所属の場合は機関数0とカウントし、この欄の記載不要											

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数			
			うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文(単著・共著)				
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)				
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	5			
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)				
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)				

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

雑誌名	掲載論文数	掲載年月日	論文名	発表者名
密教図像	5	R3. 12	クチャ(亀茲) 国の早期の説一切有部系仏教寺院の復元的考察	<u>檜山智美</u>
史林	7	R4. 1	都市の廃絶と交易ルート-クシャーン朝勃興期のバクトリアの場合-	<u>岩井俊平</u>
アジア・アフリカ言語文化研究	11	R4. 3	アブディー・ベグ版不動産目録 17-18 世紀写本欄外に記載されたシャー・イスマーイールのファルマーン	<u>小野浩</u>
アジア・アフリカ言語文化研究	3	R4. 3	『天国の諸庭園 (Rawḍāt al-Jannāt)』の写本と未校訂箇所の研究	<u>杉山雅樹</u>
アジア・アフリカ言語文化研究	11	R4. 3	『ティムールのワクフ文書』再考	<u>杉山雅樹</u>
EuroNarasiaQ	7	R4. 3	正倉院の鷲連珠文錦について	<u>影山悦子</u>

11. 費目の 30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由  
なし

12. 次年度の研究実施計画

夏前までに一旦写本の会読を終え、これまで作成した訳注の見直し作業に入る。年度末に向けて日本語訳と注釈を作成し、紙媒体（東方学報）もしくはオンライン出版として公表する予定である。

13. 次年度の経費

なし

#### 14. 研究成果公表計画および今後の展開等

上記の通り、日本語訳注を準備し、PDF での公開もしくは Web 出版の形で成果を公表する。今後は類似の資料の訳注についても材料がある分は同様にして公開したいと考えている。